

人権フェスティバル開催

人権尊重社会をめざす県民運動の一環として開催されます。お気軽にご参加ください。

期日 10月24日(金)

時間 開場 午後0時30分
開演 午後1時30分

場所 秩父宮記念市民会館

内容

◆オープニング

障がい者支援施設さやか「郷土芸能クラブ」と「音楽クラブ」による郷土芸能上演および音楽演奏

◆講演会

落合恵子「こころの居場所」
クロージング

◆NPO法人 自立工房山叶
本舗による和太鼓演奏
※ホワイエにて物品・野菜などの販売も行われます。

入場料 無料

問合せ 総務課行政担当

☎ 6211230

内線 203

人権作文

「差別に気づく眼」

皆野中学校2年

新井 啓介くん

けいすけ

日常生活でいろいろな人を見て、「この人は自分とは何か違う。」と思ったことはないでしょうか。僕は何度もあります。ほかの人も必ず経験していることだと思います。何が違ったのかは人それぞれですが、僕の場合同じなことでした。

それは、小学三年生のときに家族でイタリアを訪れたときのことです。あるとき、僕と母と姉の三人でエレベーターに乗っていました。階を上り、扉が開きました。すると、目の前には背が高く、横幅も広くて、肌の色が黒いアフリカ系の男性二人が立っていました。その二人は僕たちと同じエレベーターに乗りました。その瞬間、エレベーターの中の雰囲気が変わりました。小学生の僕は「とてもこわい」という感じを受けました。おそらく母と姉も同じ感じを受けたのだと思います。同時に母は「黒人に対するこの雰囲気はまずいことだ。」と思ったのですが、小学生で黒人に対して恐怖感をもっていた僕達をどうすれば安心させられるのかわからなかったのでしょうか。僕たちは喋ることもできませんでした。

静まり返った密室の空間で日本人の黒人に対する「差別の目」がはっきりと行動にでた瞬間でした。僕は黒人「こわい」という今までの思い込みにより、無意識のうちに行動にまで表れてしまいました。

これは最近になって母から聞いた話です。今では黒人に対してこわいというイメージはほとんどなくなりました。しかし、実際に目の前で僕と黒人が一対一という状況になったらどのよう感じる、どのようなことを考えるかは正直自分でもわかりません。もしかしたら、一瞬でも再び「こわい」と感じてしまうかもしれません。どう感じ、どう考えるかわからないからこそ差別について考える意味があると思うのです。わかっている差別だつたらたとえ一秒という短い間でも絶対になくすようにする努力が必要です。

また、障害者に対しての目はどう向けられているのでしょうか。障害者とよばれる人達の中にも外見からはっきりとわかる人もいれば、目には見えない障害をもった人もいます。ここになぜ障害者について書くのかというと自分の父が障害者だからです。僕の父は僕が生まれてすぐに失明しました。僕自身は幼い頃からの流れでそのことについては特に意識したことはありません。姉は父が失明した頃は周りのことが少しずつわかってくる年になっていました。だから、今までに僕よりも周りの目を気にして生きてきたのかも知れません。しかし、それとは比べものにならない苦しみを知っているのは父本人なのです。旅行などに行く機会が多くなります。

この話もイタリアでのことです。ローマ市内を家族で歩いていると、前から白いつえをつきながら歩いてくる一人の女性がいました。その女性も父と同じく周りが一切見えない障害者です。日本で生活しているときと違った光景が見られたのはこのときです。つえをついて歩く女性の周りにはたくさんの手伝いをしてる人がいたのです。その人は女性に道や障害物などを声で示してあげたりしていつでも親切でした。このようにヨーロッパでは地域全体で障害者に対しての理解がとても高いことがわかりました。日本でも理解のある人はもちろんたくさんいます。しかし、無意味な笑いや障害者に対する言動が健常者に対してとるものと異なる人もなかにはいます。それは父も感じていることがあります。なかでも覚えていることがあります。それは日本は日本の空港の店で昼食をとっているときに父が「早くでよう」と言ったことです。

あとで聞くと、店員の人の態度が父のときだけ違って、嫌がっていたからだそうです。このときはヨーロッパから帰国した後だっただけに店員の無意識の差別を強く感じました。やはり、日本では他の国ほど障害者に対して理解されていない部分があるのだと実感しました。

これまでの自分の経験から、人間が自分とは違うもの比べて違う部分を認められないことから生まれる差別があるのです。それはもちろん、僕自身の中にも必ずあります。しかし、日常生活の中で気づかずに生活していることも多く、周囲の人を知らずに傷つけてしまっていると思います。一人一人が自分の心に気づく眼を持つことが一番大切なことなのです。

これから、様々な人と出会い、関わっていく中で違いを個性として認め合えるようになる努力をしていきたいです。その答えは一生かかってもわからないかもしれませんが、だからこそ、自分の今もっている「差別の目」をできるだけ「平等の目」に近づけていきたいと考えています。

